

高等学校教育の在り方ワーキンググループ(第2回)における主な意見

- 多様な人間関係の中で得られる学びを踏まえれば、一定の規模を確保することが重要であるが、少子化が加速する地域においては、学校の存続は地域の存続にも関わる重要な課題。生徒が通学できる範囲に学校があることも必要。小規模校を残していくためには遠隔授業や、これに必要な教員の加配、地域との連携、外部人材の活用などが有効。
- 対面授業の代替ではない遠隔教育を行っていくことが重要。遠隔教育の特性をどう生かすかということが求められており、これが高等学校教育の質の担保を考えたときに非常に重要。
- 小規模校は、地域との連携・協働を通して、地域に根差した学校として生徒を育むことができる。こうした学校の教員は数が限られているが、働き方改革や指導体制の充実を進めるとともに、地域との協働や他校との連携を行うために、コーディネーター等の外部人材の配置を推進していくべき。
- 少子化の中で、1学級当たりの生徒数を減らすことは非常に理にかなっており、双方向で個別最適な教育を実現する上でも必要なことではないか。
- 外部人材の活用事例として、専門高校ではマイスターハイスクール事業があり、企業や大学の職員が学校の管理職としてマネジメントに参画しており、良い取組が行われている。
- 学校同士で連携するためのプラットフォームを整え、複数の高校がICTを活用して連携した探究的な活動を行えるようにしていくべき。
- 地理的状况などにより異なる価値観・考え方の生徒同士で切磋琢磨できるよう、生徒が多様な選択肢から特色ある高校を選べる環境を整えていくことが重要であり、各高校の特色化・魅力化を通じて、生徒に行きたいと思ってもらえる学校づくりが必要。
- 学校・地域によって生徒の進路が固定化されるようなことがあってはならず、どの地域においても、生徒が自分の希望に沿った進学ができるよう、高校が進路先の多様化に対応できることが必要。生徒の進路保障は、全ての高等学校において確保されるべき。
- 少子化が加速する地域における高等学校の在り方を考える上で、地域や学校の視点も重要ではあるが、一番大事なことは生徒にとってどうかという視点。既存の学校をそのまま残そうとするのではなく、今ある学校が機能しているか、生徒にとってどうかという観点から、これまでの前提にとらわれず、新しい学校をイメージしていくことが重要。
- 今後は、フルセット型ではない、規模の小さいミドルスクールも1つの選択肢。